

## 初等中等教育における哲学教育の現場から考えた 哲学の範囲と哲学の意義

山田圭一（山形大学）

私は二年ほど前に「子どものための哲学教育研究所（通称：J I P E C (<http://www.jipec.org/>))」を立ち上げ、そのメンバーとともに大学以前の段階（小・中・高校段階）での哲学教育に関する調査研究と実践を試みてきた。今回のワークショップでは「哲学の範囲を描き直す」という壮大な題目と、「現在から10年後、30年後にかけて、哲学的営みとして有意義であるものはなにか」という遠大な問いをオーガナイザーから与えていただいたのだが、私はこの初等中等教育における哲学教育という幾分つましやかな観点から、この二つのテーマについて考えてみたことを報告させていただきたい。

本発表で考察の足場とするのは、①海外における初等中等教育段階での哲学教育の理念と実践、②私自身が高校生対象の塾で行ってきた哲学教育の理念と実践、の二つである。

まず①に関して、諸外国では初等中等教育段階で哲学を行うことに対してどのような理由づけを与えているのかを概観することによって、「哲学の意義」を強調する際のいくつかのプロトタイプを抽出してみたい。そして、その中でも特に私が今年実際に視察したハワイの高校（及び小学校）における「p4c (philosophy for children)」の実践と、ドイツのギムナジウムにおける教科「哲学」(das Fach Philosophie)の授業実践を取り上げて、私自身が直面することになった「子どもたちが何をすると『哲学した』ことになるのか」という一種の哲学の線引き問題について考察し、自分なりの線引きの基準を提示してみたい。

しかしながら、他人がやっていることを外野から検討するだけで終わるのではあまりフェアなやり方ではないように思われるので、先の②の観点から、私自身がどのような思いを込めて、どのような仕方と哲学を試みてきたのか、を少しだけ紹介させていただきたい（昨年来、日本哲学会では言語教育、日本倫理学会では道徳教育の観点からの授業実践を紹介してきたが今回は科学哲学会なので、「科学の哲学」の授業を題材に）。

そしてこちらの実践を通じて、私自身改めて考え直させられた問題について可能な限り考察していきたい。それはたとえば、哲学することの意義を自分自身がどこに見出しているのかという問題であり、自分の考える哲学の意義と対外的に（塾や他の先生や保護者や生徒に対して）説明する哲学の意義との間に存在するギャップの問題であり、さらには哲学者（であると一応自負している自分自身も含めて）が初等中等教育の現場で哲学の実践を試みる必要性や有用性が本当にあるのかといった根本的な問題、等々である。

とりわけこの最後の問題などは、科学者と科学教育との間に生じる問題と類比的な構造を有しているようにも思われるので、これらの私自身考えあぐねてきた諸問題をこの機会に科学哲学会の会員の方々と一緒に考えささせていただければ、この上もなき幸いである。